2006・平成18年

復習用現代語訳

夜寝ていると、机をかじる鼠がいて、カリカリと音がする。鼠が机の上の本をかじるのを心配した私は、暗くてよく見えないまま杖を投げつけた。杖は鼠に当たらない。鼠はかじるのやめたがしばらくしてまたかじり始めた。私はとうとう寝ていた童子（年少の召使）に命じ、鼠を追い払わせた。これで鼠はしばらく姿を隠したが、童子が寝るとまたかじり始めた。当時私は猫を別の部屋で飼っていた。私はねずみを追い出せないとわかったので、童子に命じて猫を寝室に連れてこさせた。これでカリカリという先ほどの音はまったく聞こえなくなった。

さてはて、人は鼠より賢いが、鼠を制することは人にはできず、猫ならできる。猫は人より賢くないが、鼠は猫を恐れて人を恐れない。このように考えると、人にも猫にもそれぞれの職分があるものだ。各種の地位についているエリートたちもまた自分の職務を全うするのみ。（「しかし役人たちは本分を忘れて権力闘争にあけくれ、職務権限を利用して賄賂を取っている。嘆かわしいことだ。」と筆者

は言いたいのだろう。これをまともに言えば政敵に殺されるので、たわいもないたとえ話でチクチクと現実を風刺するしかない。）

訳注――機械的翻訳では意味が通じないので意訳を多用した。

1　寂：静かなさま。

2　君子：エリート。政治指導者となるべき人格者。（現実には官僚や大地主などの支配階級であり、人格の完成度は問われない。この文章は明代なので、「君子」は科挙に合格して官位についている人々を指す。）

音読用書き下し文

胡子夜臥するに、鼠の案に噛む有り、其の声磔磔然たり。胡子鼠の其の書を傷るを懼るるや、乃ち暗に投ずるに杖を以てす。杖鼠に中つる能はず。鼠暫く止めて復た作す。遂に童子に命じて起きて之を逐はしむ。鼠稍竄れ去る。童子の枕に就くに及び、鼠復た噛みて已まず。時に貍奴別室に乳はる。胡子鼠の去る能はざるを度るや、是に於いて童子に命じて貍奴を取りて臥内に置かしむ。是れに由りて向の磔磔たる者寂として聞こえず。噫、人鼠よりも霊ならざるに非ざるも、鼠を制すること人に能くせずして貍奴に能くす。貍奴人よりも霊なるに非ざるも、鼠貍奴を畏れて人を畏れず。然らば則ち彼

各職(おのおのしょく)有るなり。君子の其(そ)の職に居(お)る者も、亦(ま)た其の職を尽(つ)くすのみ。

ステップ1　**最初の2行**を見る

「鼠が机を噛む…杖を投げる…鼠に中(あ)たらない」

ステップ2　**最後の3行**を見る

オシリから　読むとわかるよ　お結論 m10

早読みは　最初と最後に　主語述語 m9

うしろからながめて行くが、最終行「彼」という指示語の内容をつかむのに時間がかかるので、「彼」以降を読む。

「おのおの職あるなり。君子のその職におる者も、またその職を尽くすのみ。」

最後の3行の最初（5行目）は二か所問題になっており、時間がかかりそうなので読まない。

ステップ3　**最終設問の選択肢**を見る

問6　三つのステップで共通する言葉は次のとおり。

1・2・7行　鼠　杖　君子　職

①　鼠　君子

②　君子　役割←役職←職{熟}174

③　鼠　杖　君子

④　鼠　杖　君子

⑤　動物　君子

決め手を欠くので、「正解は正確な訳で作られる」m19という原点に帰り、末尾の「君子のその職におる者も、またその職を尽くすのみ。」の訳に近い選択肢を探す。「その職」の指示語「その」は、[指示語は直前を受ける]という小学校で習う原則により、直前の「君子自身」。すると正確な訳に近い選択肢は次のように②しかない。

君子も…またその職を尽くす

←

君子も…また自身の役職を尽くす

←

②君子は、自分の役割…を十分にやりとげる

なお「早読みは　最初と最後に　主語述語」により、主語・述語で整理した他の選択肢は次のとおり。

①君子は…適材を適所に配置する

③君子は…最も効果的な方策を選ぶ

④君子は…適切な使い方をする

⑤君子は…能力を発揮させる

これで正解②が確定し、筆者の主張も②でつかんで退却。

問1〔漢〕（1）「遂に」[152]の正解は①。

問2〔熟〕「前後の状況を説明したもの」を選べという問題なので、ひたすら波線部の前後を訓読した。

（ア）「杖、鼠に中つる能はず。鼠暫く止めて復た作す。」「作」は熟語化すれば「動作」。ここでは一行目の「噛む」が鼠の動作。だから「また噛む（かじった）」となり、②③④。②の「杖をかわすことができた」は原文にないのでキズ。「復」は「復た」と読まれているので③の「すぐに」はキズで、④の「ふたたび（また）」が正解。

（イ）「鼠やや竄れ去る。童子の枕に就くに及び復た、噛みて已まず」「就」は「就職＝就レ職」という熟語からわかるように「つく」と読む。「枕に就く」は「就寝」と同じく「寝る」の意味。そこで①の「寝たふり」、②の「枕に近づこうとする」はキズ。②の「近づく」は「近い」と「つく」から作ったヒッカケ。だから「近＋づく」は絶対に「就く」と同じではないのだ。

「童子の枕に就くに及び」の訳は、「の」が主格の「が」だから「童子が寝るに及んで」。そこで「眠ったまま」の④は切れる。③と⑤で

は、③の「また童子の枕をかじった」がヒッカケ。一行目を見ると鼠がかじったのは「枕」でなく「案（つくえ）」でした。そこで⑤が正解。

問1〔熟〕（2）「度」は「1字の漢字は熟語で訳せ。熟語の訳で正解探せ！」174で熟語にすると「度量（どりょう）：度＝量（はかる）」なので、正解は「はかる」の③。

問3〔漢〕「命（めいジ）二童子（どうじニ）」はなんとか読める。また、傍線Aの直前の「於（おイテ）レ是（ここニ）」の訳は「そこで」146。すると傍線Aとその前の文章の関係は「胡子…、そこで童子に命じ…」となっているのだから、「胡子が童子に命令し→胡子が童子に指示して」という③か⑤。あとは「貍奴を取りて臥（がない）内に置く」と読めれば「猫を取って寝室注5に置いた」→「猫を寝室に移」す⑤が正解とわかる。

なお、「命」は「命（めいジテ）レA B（ニ シム）（Aに命令してBさせる）」という使役であり、「童子に命じて貍奴を取りて臥内に置かしむ」と訓読するので、⑤「猫を寝室に移させた」という訳になるが、それができなくても正解に至る。負担の最小化を図った拙著『早覚え速答法』では使役で「命」を採用しなかった。「〇〇に命じて…しむ」と読めなくても合格するし、出題者も2・3行目で「童子に命じて…これを逐はしむ」と読んでくれているよ。

問4〔主張〕　早読みは　最初と最後に　主語述語により、最初の1行目を見ると「胡子（は）鼠の（＝が）其（そ）の書を傷（やぶ）るを懼（おそ）る」とあるので、筆者は鼠が書物を傷つけるのを恐れていたのだ。そして傍線Bで鼠のかじる音が「聞こえず」の状態になると筆者は「ようやく安眠できる」ので②が正解。

最初はこの文章が論文であることに気付かなかったかもしれないが、傍線Bまでが〔事例〕、傍線Bの次の「噫（ああ）」以下が〔事例に基づく考察〕という構造になっている。だから〔事例〕の最後が傍線Bであり、その内容をつかむには最初の文が根拠になるのだ。センター試験の問題文は常に論文だと警戒しておこう。

残りの選択肢のキズは次の通り。①「さびしく」は傍線Bの「寂（せき）」から作ったヒッカケ訳。ここでの意味は「寂（さび）しい」ではなく「物音がしないこと」。③「物音がしなくなった」のは「別室」でなく筆者が寝ていた寝室（臥内（がない））。④はすべてキズ。⑤は「猫も別室から出て行った」がキズ。そんなことは書いてない。

問5〔強〕〔熟〕〔漢〕　「非（あらズ）レ不（ざルニ）レ…」は二重否定の「…でないことはない」だから強い肯定「必ず…」104。「1字の漢字は熟語で訳せ。熟語の訳で正解探せ！」174により「霊」は熟語にして「霊長」、「制」は「制

圧」。「能(よ)く」の訳は「できる」[162]。「不能」は不(ず)レ能(よクセ)と読んでも不(ず)レ能(あたハ)と読んでも訳は「できない」[140]。

以上を使って傍線部を訳すと「人は必ず鼠より霊長（なの）に、鼠を制圧すること（は）人にできず、猫にできる。」すると①「おさえる←制圧」と④「支配←制圧」の戦い。④「霊長類の最たるもの」という訳はヒッカケ。「霊長」の「長」は「長所：すぐれた所」の長なので、①「すぐれている」が正解。「霊長」＝①「すぐれている」ではあるが、「霊長」＝④「霊長類の最たるもの」ではないぞ。